

Der Fall Trakl

一戦後オーストリア文学による詩人トラークルの
発見と聖別¹

日 名 淳 裕

1. ヴァインヘーバーの場合

1947年に出版されたウィーンの雑誌『トゥルム』（第二期第5/6号）の巻頭に掲載された論文「ヨーゼフ・ヴァインヘーバーとその遺言（Josef Weinheber und sein Testament）」²は、同年に刊行されたヴァインヘーバー（1892-1945）の遺稿詩集『ここに言葉がある（Hier ist das Wort）』に収められた詩「五十歳で（Mit fünfzig Jahren）」を例にとり、すでに詩人が第二次世界大戦中の自らの政治的過誤を悔いていると主張して免責を試みた。この『トゥルム』編集部による提案は、おそらく編集部の期待どおりに、文学者の戦争責任をめぐる広範な議論を呼び起こし、次号（「ヴァインヘーバーをめぐる議論（Debatte um Weinheber）」）、次々号（「もう一度、ヴァインヘーバーの場合（Noch einmal: der Fall Weinheber）」）に企画が引き継がれた。その過程で、最初の論文が強く訴えた、ヴァインヘーバーが1942年の時点でナチスに協力したことを後悔しており、1945年の自死は贖罪であったとする意見は目立たなくなる。雑誌の企画は、様々な立場の論者がそれぞれヴァインヘーバーについて語るオムニバスへと変質し、最後には、ヴァインヘーバーについて沈黙を破ったことそれ自体に功績があるとされた。ナチスに協力した文学者を免責するという当初の目論見は、そもそもこの企画が『トゥルム』という雑誌の垣を超えて広がることがなかったことに加え、寄稿されたコメントがしばしばヴァインヘーバーとの個人的な思い出の披歴に留まるなどして十分な深まりを見せなかったため失敗し、似たような経歴を

持つドイツ・オーストリアの知識人たちを免責するためのモデルケースにもなりえなかった。今日から見れば、この一連の騒動はアンシュルス以後の七年間をヒトラーという一人の狂人によってもたらされた災難として他責化し、ただアンシュルス以前の伝統に立ち返ることでオーストリア的なるものの同一性が保証されると考える³戦後オーストリアの特徴を浮か上がらせる出来事の一つであったといえる。

2. トラークルの場合

2.1. 『トゥルム』の構成と様々な「場合」

上述の議論の発端となった『トゥルム』はとても興味深いつくりとなっている。冒頭に「ヨーゼフ・ヴァインヘーバーとその遺言」が置かれたのち、号の大部は「今日の英国 (England heute)」という副題のもとにイギリス文学の紹介に割かれている(フェリックス・ブラウン、ヒルデ・シュピールおよびエゴン・ゼーフェールナーという戦後オーストリア文学の初期に重要な役割を果たした二人の作家と一人の編集者がその始めと終わりに寄稿している)。この特集のあとに続くのが、神学者アウグスト・ツェヒマイスター (August Zechmeister 1907-1963) の論文「ゲオルク・トラークル —キリスト者の証 (Georg Trakl —Hinweis auf den Christen)」⁴である。この後にはイルゼ・アイヒンガー (Ilse Aichinger 1921-2016) の散文「埠頭 (Der Kai)」が掲載されている。ここで関係者の生年を確認しておく、ブラウン、トラークル、ヴァインヘーバーはいずれも十九世紀後半に生まれており、シュピール、ツェヒマイスター、ゼーフェールナーは1911年生まれ、アイヒンガーは1921年生まれである。すなわちこの号の執筆者構成は、往年のハプスブルク帝国を知る「旧世代」から、第一共和国期に青年であった「中間世代」を経て、1920年以降に生まれた「新世代」へと繋がる理想的な連続性を再現するものである。⁵『トゥルム』は同時期に刊行されて左派的と見なされた雑誌『ブラーン』と比較して、支持母体がカトリック系のオーストリア文

化協会ということもあり、その保守性が注目されることが多い。しかし根本において二つの雑誌がオーストリア文学の連続性を保持しようと努めた点では変わらない。⁶ この時期の出版事業は占領軍の関与なしには成り立たなかったが、『トゥルム』（第二期第5/6号）を例にとれば、ブラウンとシュピールを通した形での英国特集が中心ではあるが、その前後に二人のオーストリアの詩人ヴァインヘーバーとトラークルを配置している点に編集部の強気を見て取るべきだろう。ドイツ語によって書かれるオーストリアの文学は戦争に負けてなおあるし、外国に占領されたとしてもその伝統の優位は揺るがないというのだ。『プラーン』の表面的な開放性の背後に控えているのも同じ信念である。敗戦と国家の分割占領統治という厳しい現実にもやはりオーストリア的なるものこそが、何よりもまず雄弁であるように計らわれている様子をこそ、これらの雑誌の構成に確認するべきだ。⁷

このような号の冒頭に収録されたのが「ヨーゼフ・ヴァインヘーバーとその遺言」であった。ここで初めて「ヴァインヘーバーの場合 (Der Fall Weinheber)」というフレーズが用いられたわけだが、ドイツ語の Fall という語は、法律言語として「討議の対象 (Gegenstand der Auseinandersetzung)」を表したところからしばしば人名に添えて使われるようになった。⁸ 『トゥルム』にこの語が登場するのはまず「トーマス・マンの場合 (Der Fall Thomas Mann)」⁹、つづいて「もう一度ニーチェの場合 (Noch einmal „Fall Nietzsche“)」¹⁰、それからヴァインヘーバーであった。トーマス・マンのものは、戦後にドイツへの帰国が実現しなかった事情について作家の立場に寄り添って解説したものだ。ニーチェに関するものは「近代 (modern)」の概念を手掛かりとして、戦後にあえて彼の著作を読む意義について検討している。¹¹ ここで二人のドイツ人は、負の歴史としてのナチズムへの関わり方についてモデルケース化されているが、その際にはドイツ語 Fall が個別の「事件」という意味を超えて、広く参照されるべき「判例法 (Fallrecht)」を指している。語の用法においてマンとニーチェがヴァインヘーバーへの伏線となって

おり、トゥルム編集部が「ヴァインヘーバーの場合」¹²と言うときにはそもそもこうした意図が隠されていたことは重要である。

2. 2. 『プラーン』における「場合」と脱政治化

「ヴァインヘーバーの場合」をより立体的に捉えるために、一見対立的ではあるが、その根に揺るぎない親和性をもつ雑誌『プラーン』に目を移そう。アンシュルス以前にナチスと闘ったいわばレジェンドと見なされたオットー・バジル (Otto Basil 1901-1983) が率いた『プラーン』は「オーストリアのナチス文壇 (Vom österreichischen NS-Parnaß)」¹³ (1945年十月創刊号) や「ナードラーの場合 (Der Fall Nadler)」¹⁴ (1946年二月第一期第4冊) といった文学者の戦争責任を追及する姿勢を強く打ち出す企画とともに登場した。さらに第一次世界大戦前後に生まれた「若者たち」(「新世代」) に作品発表の場を積極的に与えつつ(「新世代」を組織しつつ)、カール・クラウス(「旧世代」)の『炬火 (Die Fackel)』と共産主義の両方を同時に想起させる赤いビジュアルで再刊された姿は当初より記念碑的であった。したがってバジルに「1945年以後のオーストリア文学」の「もろもろの端緒」を見ることは間違っていない。¹⁵ただしその際には、『プラーン』がしばしばその装いの下に隠していた保守性、つまりその「革新性」を保証したところの伝統性にも十分な注意を払うべきだろう。実際に『プラーン』が最初に示していた過去と対決する姿勢は号を重ねるごとに後景化していった。¹⁶バジルは、『トゥルム』で議論となった「ヴァインヘーバーの場合」について自らの立場を問い質したエーリヒ・フリート (Erich Fried 1921-1988) への返信で、「うちの若い人たちが次の『プラーン』でそれ(著者注:「ヴァインヘーバーの場合」へのレスポンス)を行うが、自分はやらなかった。自分を議論に招待した『トゥルム』の要求にも応えなかった」と書いている。¹⁷ここで述べられる若い人たちの試みとは、『トゥルム』における一連の議論が収束した後に、『プラーン』に掲載された「私たちとヨーゼフ・ヴァインヘーバー (Wir und Josef Weinheber)」という短文のこと

だ。¹⁸ このおそらく複数の著者の手になるマニフェストは、その批判の矛先を主として『トゥルム』編集部とその企画自体に向けていて、ヴァインヘーバーの政治的過ちについては当然のこととしつつも、詩人が自ら命を絶ってなおそれが「ドイツ」の誉れとして後の世まで残ると信じたことについては、詩人の「個人的関心事」であると断じ、それを「判例法」にしようとする「オーストリアとドイツの知識人たち」を批判した。¹⁹ この短文が発表された『プラン』(1947年第二期第3号)はカール・クラウスの記事がメインとなっており、ヴァインヘーバーについては後記においてさえも一言も触れられていない。そのため『トゥルム』への応答は表面的なものにとどまり、実際にはこの議論の終結を促しているかのような印象を与えもする。その一方でバジルは、こちらも『トゥルム』での議論が収束した1947年十月にオーストリア共産党の週刊誌『オーストリア日記 (Österreichisches Tagebuch)』で「ヨーゼフ・ヴァインヘーバーの思い出 (Erinnerung an Josef Weinheber)」という文章を発表した。²⁰ バジルはここでヴァインヘーバーがナチズムを信奉した理由を説明するにあたり、本質的に非政治的であったヴァインヘーバーの「ごく個人的な事柄 (Intimitäten)」、すなわち反ユダヤ主義と病的な自己顕示欲といった「症例」について語り始める。

何らかの断絶が、ぞっとさせるような引き裂かれた存在と虚無的な魔力が彼の中にはあったのだ。何か解き放たれないもの、救済されないものが彼の不安な魂から叫び声をあげていた。折にふれて書かれた抒情的自己像の中に、一後期の詩作品はただ一つの大きな自己表現にすぎなかったのだが一、彼は自虐的な悦びを感じながら自分の魂の過剰と暗闇を描いた。²¹

また最後にアンシュルス以後にヴァインヘーバーが書いた「総統詩 (Führer-Gedicht)」についてはいずれも強制されたものであり、「不安、反感、自己破壊的な力を英雄的身振りに隠しはしたが、そこから逃れる

にはもはや死を除いてほかはなかった」としている。²²

よく指摘されることだが、1938年に刊行された『プラーン』第一号の誌面はその多くが造形芸術のために割かれており、必ずしも文学に特化したものではなかった。そうした性格は戦後に復刊されてからも引き継がれたが、1947年に始まる第二期あたりから掲載されるものの多くが文学に絞られてくる。興味深いのは『プラーン』の文学化が『プラーン』の脱政治化と並行していることだ。『プラーン』におけるいわば Fall シリーズの最後は、第二期第4号の「ブロンネンの「場合」(Der „Fall“ Bronnen)」であるが、表題の Fall に引用符が付されていること自体がその変質を証するだろう。²³つまり、ここで Fall はもはや「判例法」を作ることを目標とはせず、『トゥルム』の試みが落ち着いていたところの「個別事例 (Sonderfall)」の提示に際する中身のない添え言葉となった。こうして『プラーン』にとっての「ヴァインヘーバーの場合」はまさに雑誌の脱政治化を外から照らし出す出来事であったわけだ。こうして見てゆくと、雑誌の文学化が推し進められた先にパウル・ツェラン (Paul Celan 1920-1970) が位置したのは、たとえ偶然であったとしても、まさしく戦後オーストリア文学の Plan を見事に示したものだと言えるだろう。²⁴

2.3. 戦後オーストリア文学によるトラークルの発見

このように詩人ヴァインヘーバーが犯した政治的誤謬の是非について戦後に裁かれることはなかった。むしろその過ちはアンシュルス以後七年間の災厄というより大きな枠組みの中に一個人の伝記的事実として保留にされ、彼の詩作品そのものは古き良きオーストリアへの郷愁とともに記憶されて今日に至る。戦後に雑誌と同じくらい大きな影響力を持ったラジオで放送されたドイツ語詩の統計を見ると、1945年から2009年までの間にもっとも頻繁に放送された詩人の第十位はヴァインヘーバーである。²⁵しかし戦後すぐあとの1945年から1951年の統計ではヴァインヘーバーの名前は見当たらない。この時期に最も頻繁に放送された

オーストリアの詩人の一人がゲオルク・トラークル (Georg Trakl 1887-1914) であった。ちなみにトラークルは 1945 年から 2009 年までの統計でも第八位である。²⁶すでに述べたように、トラークルとヴァインヘーバーは同じ世代に属する。この世代の詩人がオーストリアで最も好んで放送されてきたのはなぜだろうか。

トラークルは戦後になって新しい評価を与えられた詩人の一人である。トラークル受容に関して、アンソロジーを例にとりて年代別に考察したものによれば、「1913 年から 1932 年にかけて 117 の詩が三十のアンソロジーに収録された。1933 年から 1945 年には 17 の詩が十二のアンソロジーに、1946 年には 18 の詩が十八のアンソロジーに、1947 年には 40 の詩が九のアンソロジーに、1948 年から 1953 年には 104 の詩が二十二のアンソロジーに掲載された」。²⁷ここからはとくに 1946 年とそれ以降にトラークルの詩が多く収録されたことが分かる。戦後の読者たちによって「トラークルは表現主義の伴走者から単体の個人へと、彼の「文体」はただリルケや同時期に再発見されたカフカとのみ比較しうる詩人のものへと格上げされたのだ」。²⁸なぜトラークルの評価はこの戦後の初期に大きく変化したのか。そこではどのような力が働いたのか。それについてもまた『トゥルム』が重要な証言をなすだろう。

1946 年八月にはルートヴィヒ・フィッカー (Ludwig Ficker 1880-1967) が率いる雑誌『ブレンナー (Der Brenner)』が十二年ぶりに年鑑として刊行され、その冒頭に「思い出の詩 (Gedichte zur Erinnerung)」という標題でトラークルの詩三篇が再掲された。²⁹1910 年の創刊以来三十年以上の歴史をもち、トラークルが生前にその作品をもっぱら発表した伝説的な雑誌が復刊されたことは、疑いなく 1946 年のトラークル再評価への大きな推進力となった。戦後オーストリアで刊行された雑誌を例にとれば、1945 年から五十年代前半にかけて二十を超える雑誌にトラークルの作品が掲載されている。³⁰『トゥルム』もその中の一誌であり 1948 年の廃刊までに三度トラークル関連の記事を掲載した。これは他の雑誌と比較しても少ないものではない。最初は 1946 年九月第二期第 2 号の

「オーストリアの偉人たち (Österreichische Köpfe)」という小特集であった。³¹ つづいて第二期第 5/6 号 (「ヴァインヘーバーとその遺言」が掲載された号) に、先述した神学者ツェヒマイスターの「ゲオルク・トラークル —キリスト者の証」という論文が、そして最後に 1947/48 年号に詩「ある冬の夕べ (Ein Winterabend)」が載った。これらトラークルをめぐる三つの記事は戦後初期に試みられたトラークルの新しい評価、すなわち「読み替え」を分かりやすい形で示しているため考察に値する。

まず「オーストリアの偉人たち」を見てみよう。これは、著名なオーストリア人六名の肖像に短い伝記を付したもので、この号だけのために組まれた小企画である。六名の内訳をみると、画家エゴン・シーレ、建築家アドルフ・ロース、トラークル、作曲家アルバン・ベルク、医学者ユリウス・ヴァーグナー＝ヤウレック、政治家イグナーツ・ザイベルである。この中ではヴァーグナー＝ヤウレックとザイベルが年長であるが、十九世紀後半に生まれて二十世紀前半に死んだ点、つまりその生涯の中心に第一次世界大戦を経験している点が全員に共通している。さらに、長命だったヴァーグナー＝ヤウレックを除いては皆アンシュルス以後を経験していない。この世代の者たちを「オーストリアの偉人たち」として特集したあたりは、先のレルネット＝ホレーニアの公開書簡が表す戦後オーストリア・アイデンティティ構想を忠実になぞるものとなっている。³² そこにオーストリアを代表する文学者としてトラークルが選ばれていることには純粋な驚きを禁じえない。

文芸において早熟で早逝した者の一人であるゲオルク・トラークルは、1914 年十一月四日、二十七歳の時、クラカウの野戦病院で、おそらく毒物の過剰摂取で死んだ。彼の最後の詩の一つは「グローデク」といい、納屋で九十人の重傷者の世話をせねばならなかったが何もなしえなかった時に書かれた。彼は絶望して自分を撃ち殺そうとしたため同僚たちが銃を取り上げたのだ… 今日私たちは、トラークルの作品が収められた薄い詩集がその価値と意味に関して、アル

チュール・ランボーが世界文学の仲間入りをする事となった同じく薄い詩集（著者注：『地獄の季節（Une saison en enfer）』）に比肩することを知っている。この影絵（著者注：記事の左にある肖像を指す）は、ルートヴィヒ・フィッカーが編集した『トラークルの思い出（Erinnerung an Georg Trakl）』を飾ってもいるのだが、プラターの切り絵師が死後に仕上げたものである。³³

この短い記事がトラークルの戦後における最初の読み替えの一つであるとする理由は、ザルツブルク出身でインスブルックの雑誌を中心に活動したトラークルが、オーストリアを代表する詩人としてウィーンの雑誌に登場したことである。トラークルは1908年から1910年までウィーン大学で学んだが計画された第一詩集の出版も、遅れてウィーンに出てきた妹グレーテとの関係もうまくいかなかったため、ウィーンという街に対して屈折した感情を抱くようになる。短い期間ザルツブルクに戻ったのち、軍務につくため移動したインスブルックで出会ったフィッカーの理解と庇護のもとに独自の詩世界を完成させた。1914年八月に東部戦線に出征して、待ち望んだ第二詩集の出版を待つことなく十一月にかの地でその生涯を終えた。詩人としての短い活動期間、「薄い詩集」、そして遠方での不審死のために、トラークルは文学的には常に忘却の危機に晒された。そこでトラークルの名を人々の記憶に残すよう尽力したのがフィッカーと「ブレンナー・グループ（Brenner-Kreis）」と呼ばれた一群の文学者たちである。³⁴ それでも、先に見たように、第一共和国時代には「表現主義の伴走者」として、ナチス時代には「オストマルクの郷土詩人」として³⁵、どちらかといえば文学史の周縁に位置していたのが、戦後になってシーレやベルクと名を連ねることになったのは大きな変化である。そのきっかけは何であったのか。そしてトラークルはどのようにして戦後オーストリア文学に発見されたのか、それが問題である。³⁶

2. 4. ツェヒマイスターの論文とトラークルの「聖別」

1947年に『トゥルム』（第二期第5/6号）に掲載されたツェヒマイスターの論文は「キリスト者を指し示す（Hinweis auf den Christen）」という副題とともに、「トラークルの六十回目の誕生日」を記念して掲載された。さらに全体として三ページにも満たない短い文章であるにもかかわらず、その冒頭にフィッカーからの長い引用が置かれ、そこではトラークルの宗派が問題とされている。

私は尋ねたことはなかったが、トラークルは疑いなくアウグスブルク信仰告白にもとづいたプロテスタントの洗礼を受けている。しかしプロテスタント的なものが彼の人間に表れることはまったくなかったし、彼が幼年時代を過ごしたバロック・カトリック的世界の印象を決定づけることも少なかったので、トラークルの予見者としての眼力に独特な秩序を与えたキリスト教的態度を判断する際に、宗派の要素が重要となることはまずない。この点は慎重であるべきだろうし、今日ではかつて以上に重要であるように思われもするいろいろな視点を、トラークルの直観として決めてしまうことなく、前面に出さねばならないだろう。そうでなければ、彼の文芸作品を成熟させ、それに彼の個人的な罪の経験との関わりにおいて、ドストエフスキーの作品の中に模範として彼の目にありありと浮かんだ天空のような視野の広がりを開いたキリスト教的諸動機から、まったく誤ったイメージが生まれてしまう。他の見解はすべて彼のもつ意味を見る視野を狭めて、彼の熟慮のもつ具体的なものをとるに足らない関連付けからなる抽象的なものへと転じてしまうのだ。³⁷

このようにフィッカーはトラークルがプロテスタントであった事実を詩人としてのトラークル、予見者としてのトラークルを理解する上では重要でないこととして斥ける。トラークルはドストエフスキーの小説世界に描かれたような広い視野をもったキリスト教的予見者であっ

たのだ。トラークルをあるいは詩人をこのように解釈するのは後期ブレンナーの特徴である。その始まりにおいて表現主義的であった『ブレンナー』は長い活動期間のうちに代表的思想家とともにグループの依拠する思想を変化させてきた。カトリックがとくに強く前面に出てくるのはテオドーア・ヘッカー（Theodor Haecker 1879-1945）が中心となった中期以降であり、戦後には、アンシュルス以後の七年間に「民族生物学的文芸解釈」によってトラークルの読み替えが行われたことへの反動からそれが加速した。³⁸ さらに戦後オーストリア文学がアンシュルス以前に遡って自らの連続性を保持しようと試みたため、保守派の躊躇や反対を押し切っていわゆるモデルネの芸術を「古典的モデルネ」として受容していく過程で³⁹、根底にあるカトリック的＝オーストリア的なものの発見が好まれたという外的要因もその際には働いていただろう。ただし、トラークルが「表現主義の伴走者から単体の詩人」として認められるためにはなお特別な宗教上の問題が残っていた。それは妹との近親相姦と戦場での自死である。いうまでもなくいずれもキリスト教では絶対の禁忌に数えられるが、カトリック、プロテスタントといった宗派を超越した「ドストエフスキー的な」広い視野に詩人が位置していたとすれば、こうした不都合な事実は止揚される。神学者ツェヒマイスターは、トラークルの性質として「貧困、禁欲、忍従」をあげ、「トラークルは友からの物質的援助をアリョーシャのように受けた（著者注：質素に施しを受けた）。トラークルの人生において女性はいかなる役割も果たしていない。忍従の内に彼は自らが没落する運命にあることを承諾した」という。さらに、「これらのいわば外へと向かってなされた福音書の教える諸徳に、トラークルの作品をその深みから規定しているところの心の最奥にある苦しみ、同情、希望が対応する」という。⁴⁰ この記述は、ザルツブルク時代のトラークルの伝記に触れたことがある者なら誰であれ驚きを禁じ得ないような詩人の美化、聖人化だろう。そして作品の中に描かれた「妹」は「地上的＝性的人間ではなく、天上の両性具有者」、トラークルによって「お前（Du）」と呼びかけられる兄妹のような第二

の人間」として解釈される。その死については、「意識的に服毒自殺を図ったのかは分からないが、単なる事故の可能性があったとしても、絶対にそうでなかったとは言えない」と仄めかす。さらに、先の「オーストリアの偉人たち」でも引用されたフィッカーの手になる『トラークルの思い出』に依拠しながらこう結論する。

トラークルはキリスト者であった。そしてそのような者として彼は死をわが身に引き受けた。彼は自分に相応しい十字架に手を伸ばしたのだ。そして怒られるのを承知で言うと、この人間にあった神秘的なキリストの不在はまさにその死という見通しのきかない夜においてただ信心深い者にのみ意味をもって明かされうるのだ。その者が、この運命の、おそらく贖罪の死であった半ば自発的な死の例外的一回的事であることを前にして恐れたり心を狭めたりしてひるむことがなく、神の憐みを忘れることがない限りにおいてはそうなるのだ。⁴¹

トラークルは薬剤師官補として赴いた戦場の悲惨な光景を目にして精神状態が不安定になったためクラカウの野戦病院に一時的に収容されていた。その時トラークルは自身が軍法会議にかけられて裁かれることを恐れていたという。実際にその地でトラークルに面会したフィッカーをはじめ、付き人ロートやその他の証言が記録に残されているにもかかわらず、この詩人の作品評価に際して多くの場合、いわゆる「戦争」のイメージがその背景として固定化される傾向がある。「オーストリアの偉人たち」やツェヒマイスターの記述もその典型であり、詩に冠せられた土地の名前「グローデク」はその異国的な響きとともに具体を離れて抽象化されていった。こうして、トラークルは「一つの沈みゆく時代が人となり、言葉となった嘆き」そのものであり、1914年とともに始まった「我々の時代の預言者」とされる。トラークルは詩人としてあたかもキリストのように人類の苦しみを荷ったというのだ。だからこそ当然ト

ラークルは他の同時代人たち、「表現主義の伴走者」たちから質的に区別されねばならない。彼の非凡さを説明するには「ヘルダーリンにまで遡る必要がある」し、トラークルの同時代人で参照するに値するのはただリルケだけである。

トラークルの全作品は薄い二冊にまとめられている。それは『詩作品 (Die Dichtungen)』と『金の杯から (Aus goldenem Kelch)』であるが、後者には散文や戯曲も収められている。完全な効力を備えているのは最初に名を挙げたものだけである。もちろんこの詩人の成長を知るためには青年期作品集（著者注：『金の杯から』）もいくつかの重要なものを含んでいる。⁴²

第二次世界大戦後には、「1946年ブレンナー」に触発されて、無数の雑誌にトラークルの作品が掲載された。その中にはそれまで未公開であった書簡や記録文書も多数あった。さらにはフィッカーやブレンナー・グループが関与しない形で1939年に出版された遺稿詩集『金の杯から』⁴³に続く形で、1949年には『遺稿と伝記 (Nachlass und Biographie)』が出版され、これらのオットー・ミュラー社から出た一連の著作集が「ザルツブルク版」として広く流通した。とくに『遺稿と伝記』の編集者であったヴォルフガング・シュネディッツ (Wolfgang Schneditz 1910-1964) はトラークルの戯曲を重視して「劇作家としてのゲオルク・トラークル (Georg Trakl als Dramatiker)」という論文を公にし、新しいトラークル像を提起したためフィッカーの怒りを買った。上のツェヒマイスターの記述からは、キリスト教詩人としてのトラークルという理解から逸脱した解釈に対して神経を尖らせていたフィッカーへの忖度が窺われる。テキスト編集上問題点の少なくない『詩作品』を最も重要な著作集として位置づけ、詩以外の文芸作品をも含む『金の杯から』が二次的なものであるとされたのは、それらの中には多く異教的なモチーフが見つかるからである。⁴⁴ ツェヒマイスターは狡猾にも、このトラークル自

身の作品からは二箇所だけしか引用のない（フィッカーの言葉より少ない！）きわめて短い論文の中で、キリスト者としての、詩人としてのトラークル像を指し示すために、それと名指すことなく『金の杯から』に収められた散文「夢の国（Traumland）」から引用する。すなわち、「お前の魂は苦しみを求めている」。というの、「苦しみにキリスト教的なるものへの特別な親和性があるとすれば、その最後の時にトラークルに相応しいのは宗教的信仰の記憶である」と読み替えるためだ。このようにキリスト教詩人としてのトラークルを強く打ち出す際には必ずと言ってよいほど「ザルツブルク版」への批判が伴う。⁴⁵それはフィッカーらが文芸の中でも詩を特権的なものとして認めていたためだ。なぜなら詩は詩人の告白であると考えたからだ。いみじくもツェヒマイスターは作中の妹像について詩人によって「お前（Du）と呼びかけられている」と考えた。つまり、詩の語りの中心に揺るがない「私」があることが前提となっている。そして周囲の現実が耐えがなくなった時、宗派に基づいた世界観では捉えきれなくなった時に、トラークルは「始原的修道僧的態度」をもって自ら命を絶った。それは「贖罪の死であった」という。ここまでくれば、ツェヒマイスターがトラークルをキリスト者として示そうとする際に「ヴァインヘーバーの場合」と同じ論理に従っていることが明白だろう。トラークルはヴァインヘーバーに次ぐ「もう一人の場合」であったのだ。表現主義詩人ではなく、またザルツブルクやインスブルックの郷土詩人としてでもなく、オーストリアのカトリック詩人としてトラークルを聖別して受容すること、その目論見の背後には、人々がヴァインヘーバーを論じようとした際に暗に期待したのと同じものがあった。

3. 結語

ある冬の夕べ

雪が窓辺に落ちるとき、
 夕方の鐘がながく響くとき、
 多くの者には卓が準備され
 家はしっかりと整えられている。

少なくない者たちが旅の途上にあり
 暗い小道にある門へとやって来る。
 恵みの木が金色に花を咲かせている
 大地の冷たい水分を吸って。

さすらい人が静かに中へと足を進める。
 苦痛がこの敷居を石と化したのだ。
 そのとき清らかな明るさで輝く
 卓上のパンとワインが。⁴⁶

『トゥルム』（第二期 別冊 1947/48 年号）にはトラークルの詩「ある冬の夕べ」が掲載された。トラークルの作品が掲載されたのはこれが最初で最後であった。また雑誌全体を見ても、第一期から第二期の『トゥルム』に掲載された詩作品の中で最後の詩である。⁴⁷ 指摘したように、第一次世界大戦の戦場で人類の悲惨を予見した詩人として紹介した「オーストリアの偉人たち」、トラークルが「始原的修道僧的」キリスト教徒であったと主張する「ゲオルク・トラークルーキリスト者の証」、最後の詩行にある「パンと葡萄酒 (Brot und Wein)」という語句でキリストを暗示する「ある冬の夕べ」と、三度にわたって紙幅をトラークルに割いてきた背景には戦後オーストリア文学の強い動機があった。『トゥルム』が「ヴァインヘーバーの場合」と並行してトラークルの再評価に着手していたことがそれを裏付ける。その際にはトラークルにおける「異教的なもの」をフィッカーの言葉に従って慎重に排除していった。三度にわたる再評価の試みが 1946 年と 1948 年に刊行された『ブレンナー』

の空隙を埋めるように1947年の『トゥルム』に集中していることも偶然ではないだろう。

戦後オーストリア文学の出発に際して詩が特権的な役割を果たしたことは広く知られている。⁴⁸ 1918年のハプスブルク君主国崩壊後に、オーストリアの詩人たちは何度となく詩のアンソロジーを編んで歴史の断絶を文芸によって乗り越えようとしてきた。アンソロジーは様々な詩人が作品を持ち寄ることで、地域間、人種間、世代間を架橋する役割を果たしてもきた。⁴⁹ またアンソロジーという容器に収めることで現在の詩人たちの立ち位置を明確にする意図も込められていた。そしてヴァインヘーバーは『プラーン』のバジルや『トゥルム』を編集したルドルフ・ヘンツ、マックス・メルらと同じくそうしたアンソロジーの常連であった。したがって「ヴァインヘーバーの場合」はオーストリア・アイデンティティの問題でもあったのだ。すると、トゥルム編集部は、目論見通りとはならなかった「ヴァインヘーバーの場合」に対して、最後にトラークルの詩を掲載することで密かに回答したのだとも解釈できるだろう。

ところで、トラークルが問題となるときに、トラークル自身がハプスブルク帝国の一兵士としてすすんで戦争に参加した事実は、しばしば十分に顧みられない。⁵⁰ 有名な詩「グローデク」には、よく指摘される神話の世界やキリスト教的終末だけでなく、人が人を殺戮する生々しい現実を表した描写もある。トラークルが実際に戦場で人を殺したのかは分からないが、多くの人間の死を引き起こした戦争に立ち会ったのは事実である。だとすればトラークルや彼の「戦争詩」にも、ヴァインヘーバーと同じように戦争責任があると糾弾されてしかるべきだが、そのような意見はほとんど聞かれない。

1948年、連合軍の都合で行われた通貨改革が原因で『トゥルム』や『プラーン』を含む多くの雑誌が廃刊になった。バジルはその後、六十年代に定評のあるトラークル伝を書いたが⁵¹、今それを紐解きながら、バジルがヴァインヘーバーについて語った言葉を思い出すのである。

不安、反感、自己破壊的な力を英雄的身振りに隠しはしたが、そこから逃れるにはもはや死を除いてほかはなかった。⁵²

トラークルとヴァインヘーバーに見つかる多くの共通項についてはひとまず保留にするとして、この表現は戦後オーストリア文学が二人の「旧世代」の詩人をどのように読んだのかを如実に証する例だと言えるだろう。

本稿は令和三年度成城大学特別研究助成「ウィーンモデルネにおけるニーチェの受容とその展開」の研究成果である。

注

- 1 本稿は2021年9月12日に行われた戦後オーストリア文学研究会第三回コロキウム（オンライン開催）での発表原稿に加筆修正を加えたものである。
- 2 Josef Weinheber und sein Testament. In: Der Turm (2. Jg. Nummer 5/6, 1947), S. 169-172.
- 3 よく知られたレルネット＝ホレーニアの公開書簡がこの考えを端的に表している。「実のところ私たちはただ、一人の狂人の夢によって断ち切られたところから続ければよいのである。実のところ私たちは先へと目を向けるのではなく、ただ振り返ればよいのである。はっきりと言ってしまう、私たちは未来に媚びたり、曖昧な試みをなす必要はないのだ。私たちは、最良かつ最高の意味において、私たちの過去である、私たちはただ、私たちが私たちの過去であるということを出せばよいのである。そして私たちの過去が私たちの未来となるのだ。また外国も実際に新しいのではなく、古いオーストリアを私たちに期待しているだろう。つまりふたたび、その間にまたしてもずっと小さくなってしまい、かつての世界帝国とはその広がりにおいてもはやまったく比べようがなくなっているが、その文化、生活様式、政治的伝統のおかげで、密な国民性原理を長きにわたって保存してきたし、またそうしてゆくであろうところの国家を再び期待しているのだ。」Alexander Lernet-Holenia: Gruß des Dichters. In: Der Turm (1. Jg. Nr. 4/5, November-Dezember 1946), S. 109.
- 4 August Zechmeister: Georg Trakl —Hinweis auf den Christen. In: Der Turm (2. Jg. Nr. 5/6, 1947), S. 208-210.
- 5 三つの世代区分とその意義については、前田佳一「オーストリア文学の過去と未来の間 —マックス・メルとイルゼ・アイヒンガーを例に」『人文科学研究』

No. 15, 2019, 173-185 頁] 参照。なお、第一次世界大戦に敗れてハプスブルク帝国が消滅したのちも文学（詩）によって祖国が生き延びるとする考えは、例えば1930年にフリードリヒ・ザッハーが編集した『オーストリアの青年抒情詩アンソロジー (Anthologie junger Lyrik aus Österreich)』の序文(リヒャルト・フォン・シヤオカル)に顕著である。詳しくは以下の拙論を参照されたい。日名淳裕「『偉大な過去を誇りに、切断された祖国への信仰を表する』オットー・バジルの詩集『天秤座』におけるオーストリアの詩的再建」[成城大学法学会『教養論集』第27号, 2017, 87-101 頁] 95 頁。

- 6 日名前掲論文 98-100 頁。
- 7 前田は『トゥルム』におけるインターナショナルな特集が、ゲーテの世界文学の理想に基づいたものであっただけでなく、分割占領統治の現実の投影であると指摘する。前田前掲論文 178 頁。本稿はそこに分割占領統治へのオーストリア的なもの抵抗をさらに読み込もうと試みる。
- 8 例えば「ゴットフリート・ベンの場合 (Der Fall Gottfried Benn)」。Hermann Paul: Deutsches Wörterbuch. 10., überarbeitete und erweiterte Auflage von Helmut Henne u. a., Tübingen (Max Niemeyer) 2002, S. 316. 医学的に用いると「症例」を意味するところにかけてニーチェがタイトルとした『ヴァーグナーの場合 (Der Fall Wagner)』もよく知られている。
- 9 Alexander Lernet Holenia: Der Fall Thomas Mann. In: Der Turm (1. Jg. H. 7 Februar 1946), S. 172.
- 10 Noch einmal „Fall Nietzsche“. In: Der Turm (1. Jg. H. 10. Mai 1946), S. 300.
- 11 これはオーストリアでのニーチェ受容の批判としても読める。オーストリアでニーチェは二十世紀初頭に流行した生命主義 (Vitalismus) と区別されることなく、きわめて曖昧に受容されたという。ニーチェのテキストがもつ身振りやキーワード (超人、善悪の彼岸 etc.) の受け売りにとどまらず、その思想に対峙しえたのはホーフマンスタールらわずかであった。Vgl. Dirk Niefanger: Nietzsche-Lektüre in der Wiener Moderne. In: Friedrich Nietzsche und die Literatur der klassischen Moderne. Hrsg. v. Thorsten Valk. Berlin/New York (De Gruyter) 2009, S. 41-54.
- 12 「ヴァインヘーバーの場合 (Der Fall Weinheber)」という語が最初に用いられたのは『トゥルム』第二期第 5/6 号に掲載された論文においてである。Josef Weinheber und sein Testament, S. 170.
- 13 Vom österreichischen NS-Parnaß. In: Plan (1. Jahr, Oktober 1945 1. H), S. 72-76.
- 14 Friedrich Korger: Der Fall Nadler. In: Plan (1. Jahr, Februar 1946 4. H.), S. 340-346.
- 15 Volker Kaukoreit, Wendelin Schmidt-Dengler: Vorwort. In: Otto Basil und die Literatur um 1945. Tradition-Kontinuität-Neubeginn. Hrsg. von V. Kaukoreit u. a. Wien (Zsolnay) 1998, S. 5.
- 16 創刊号に掲載された「オーストリアのナチス文壇」は予告と異なり実際には引き継がれることがなかった。1946 年 3 / 4 月第 5 冊に掲載された同タイトルの短文には、「オーストリアのナチス文壇は何人かの今日最も高く評価されているオーストリアの作家らを輩出した。そのため第一冊の寸評は進展を見ねばならないだろう。ただ私は、現在まだ進行しているいくつかのある種の反乱に先んずることはしたくない。つまり現在の私たちの関心は、すぐれた共和國的ナチス作家たち

- よりずっと、彼らを助けてまさにオーストリア的な権威を与えた黒幕にこそある」と書かれており、この企画が継続されないことの弁明のようにも読める。Vom österreichischen NS-Parnaß. In: Plan (1. Jahr, März-April 1946, 5. H.), S. 408.
- 17 Daniela Strigl: Spurensicherung auf dem „österreichischen NS-Parnaß“. Otto Basil und die Debatte um Josef Weinheber. In: Otto Basil und die Literatur um 1945, S. 66-76, hier S. 66.
- 18 Wir und Weinheber. In: Plan (2. Jg, 1947. Nr. 3), S. 210-211.
- 19 Ebd., S. 211. この考えは『トゥルム』に寄稿した者の中ではカール・クラウス協会設立発起人の作家エトヴィーン・ロレットのものに比較的近いが、ロレットとは対照的にヴァインヘーバーへの批判が抑えられている。
- 20 バージルの文章は「ヨーゼフ・ヴァインヘーバーの思い出」というタイトルで発表されたが、週刊誌の表紙には「ヴァインヘーバー事件 (Der Fall Weinheber)」と大見出しがついた。こうした見解の不一致も『トゥルム』で繰り広げられた「ヴァインヘーバーの場合」の実際と帰結を証言している。Vgl. Otto Basil: Erinnerung an Josef Weinheber. In: Österreichisches Tagebuch. Wochenschrift für Kultur, Politik, Wirtschaft. (10. Oktober 1947/ 2. Jg. Nr. 36), S. 10-12.
- 21 Ebd., S. 12.
- 22 Ebd.
- 23 劇作家アルノルト・ブロンネンの作品が掲載されることに懸念を表明する読者の手紙 (1946年) とブロンネンが第三帝国と闘ったことを証明する文書および本人の手紙 (1947年) を併記したのちブロンネンの作品を掲載している。Der „Fall“ Bronnen. In: Plan (2. Jg. 1947, Nr. 9.), S. 232-233. こうした『プラーン』のもつ演劇的性格、例えば綱領を好む形式、表面的にとどまる批判 (O. B. による『トゥルム』の企画「オーストリア的とは何か」へのコメント (1946年10月第10冊) など)、あるいは本質的な芸術至上主義は、雑誌が刊行された時期の政治的背景から説明を試みるべきかもしれないが『トゥルム』と多くの共通項を示す。『トゥルム』は「芸術は非政治的であり、特定の時代に成立したにせよ、無時間的なものを目指す」と考えた。Rüdiger Wischenbart: Literarischer Wiederaufbau in Österreich 1945-1949. Am Beispiel von sieben literarischen und kulturpolitischen Zeitschriften. Königstein/ Ts. (Anton Hain Meisenheim) 1983, S. 16.
- 24 Paul Celan: Der Sand aus den Urnen. In: Der Plan (2. Folge. 1948. Nr. 6), S. 363-369. ツェランがパリへと向かう途上にインスブルックにあるトラークルの墓に立ち寄った逸話と彼の戦後オーストリア文学との複雑な関係については以下の拙論を参照されたい。日名淳裕「フィッカー、ツェラン、ハイデガー オーストリア戦後抒情詩の展開とトラークル像の変遷」[東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語・ドイツ文学研究会『詩・言語』第79号, 2014, 75-95頁]。
- 25 ラジオ局 Rot-Weiss-Rot の番組 „Du holde Kunst“ の統計。Wolfgang Hackl: Lyrik als säkulare Erbauung? Lyrik im Sender *Rot-Weiß-Rot* am Beispiel der Radiosendung *Du holde Kunst* in den Jahren 1945-1951/55. In: Literaturvermittlung und Kulturtransfer nach 1945. Ludwig von Ficker im Kontext. Hrsg. v. Markus Ender u. a. Innsbruck u. a. (Studien) 2020, S. 207-218, hier S. 212.
- 26 Ebd. 第四位のアントン・ヴィルトガンスに次いで第八位 (ヨーゼフ・ライトゲ

- ブと同順位)。1945年から2009年まででは第二位リルケ（1945年から1951年ではランク外）に次いで第八位。
- 27 Walter Methlagl: Wirkung und Aufnahme des Werkes von Georg Trakl seit dem ersten Weltkrieg. In: Londoner Trakl-Symposion. Hrsg. v. Walter Methlagl und William E. Yuill. Salzburg (Otto Müller) 1981, S. 13-32, hier S. 25.
 - 28 Ebd., S. 27.
 - 29 「夕暮れの国の歌 (Abendländisches Lied)」、 「魂の春 (Frühling der Seele)」、 「死者の歌 (Gesang des Abgeschiedenen)」 の三篇。Georg Trakl: Gedichte zur Erinnerung. In: Der Brenner (16. Folge. 1946), S. 11-13.
 - 30 オーストリア国立図書館 HP のポータルを参照。Literaturzeitschriften in Österreich 1945 bis 1990 (onb.ac.at) [2023年1月6日閲覧]。
 - 31 Österreichische Köpfe. In: Der Turm. (2. Jg. Nr. 2, 1946), S. 85-86.
 - 32 註3参照。
 - 33 Österreichische Köpfe, S. 85.
 - 34 1919年最初の全集『詩作品 (Die Dichtungen)』刊行、1925年トラークルの遺骸をクラカウからインスブルックへ移送、墓の建立、1926年『ゲオルク・トラークルの思い出』刊行など。三十年代には経済と政治を理由に目立った活動ができなかったが1946年になってふたたび雑誌にトラークルを掲載、以後1948年、1954年に『ブレンナー』を刊行してトラークルの文学史的意義について論じた。
 - 35 第三帝国期のトラークル評価の代表的なものとしてナードラーの文学史があげられる。Josef Nadler: Literaturgeschichte des Deutschen Volkes. Dichtung und Schrifttum der deutschen Stämme und Landschaften. Bd. 4. Reich (1914-1940). Berlin (Propyläen) 1941, S. 456.
 - 36 例えば『トゥルム』創刊号に掲載されたブルク劇場のドラマトゥルクでトラークルの親友としても知られるエアハルト・ブッシュベック (Erhard Buschbeck 1889-1960) の文章「ムーヅルからチョコアへ ウィーン文学の一章へのメモ」ではヘルマン・バルルのウィーンモデルネから1945年へとつながるオーストリア文学の系譜が、多くの作家らについて具体例を挙げながら確認されているが、トラークルの名は一度も現れない。Erhard Buschbeck: Von Musil bis Csokor. Notizen zu einem Kapitel Wiener Literatur. In: Der Turm. (1. Jg. Nr. 1, 1945), S. 14-15.
 - 37 Ludwig Ficker: Briefliche Mitteilung. In: Zechmeister: a. a. O., S. 208.
 - 38 以下の拙論を参照されたい。日名淳裕「民族生物学的文芸研究から作品内在解釈へ—1940年代のトラークル理解における転換と連続性」[成城大学法学会『教養論集』第28号, 2018, 111-124頁]。
 - 39 Wischenbart: a. a. O., S. 16.
 - 40 Zechmeister: a. a. O., S. 208.
 - 41 Ebd., S. 209.
 - 42 Ebd.
 - 43 Georg Trakl: Aus goldenem Kelch. Die Jugenddichtungen. Vorw. von Erhard Buschbeck. Salzburg (Otto Müller) 1939. トラークルがウィーン時代に出版を計画していた『選集1909』が収録されており、当時より「選集」を預かっていたブッシュベックが編集した。トラークルがフィッカーと知り合う以前の作品集である。

- 44 この考え方はブッシュベックによる序文の内容を踏襲しているが、他ならぬブッシュベックその人もフィッカーに配慮して『金の杯から』を編集した。Erhard Buschbeck: Vorwort. In: Trakl: Aus goldenem Kelch, S. 5-8.
- 45 1954年の『ブレンナー』最終号でフィッカーは「ザルツブルク版」の編者の一人であったヴォルフガング・シュネディッツを激しく攻撃した。それは彼がキリスト教詩人としてのトラークルと合致しない初期の戯曲作品を掲載したためである。拙論「民族生物学的文芸研究から作品内解釈へ—1940年代のトラークル理解における転換と連続性」115-116頁。
- 46 Georg Trakl: Ein Winterabend. In: Der Turm. (2. Jg. Nr. „Zur Jahreswende 1947/48“—Sonderheft), S. 443.
- 47 第三期『トゥルム』は一号しか刊行されなかった。
- 48 『プラーン』では「オーストリア詩の小アンソロジー (Kleine österreichische Anthologie)」という企画がシリーズ化され、様々な新世代の詩人が紹介された。同時に若者たちをトラークルら旧世代の詩人に接続することが図られた。詳しくは以下の拙論を参照されたい。日名淳裕「戦後ドイツ語抒情詩の出發「プラーン」とトラークルを手がかりとして」[『現代詩手帖』第11号, 2017, 86-89頁]。
- 49 例えば以下のようなものがある。「ドイツ=オーストリア」、「表現主義」、「オストマルク」など様々なコンセプトが示すのは、アンソロジーの編集がまさにオーストリア・アイデンティティの探求であったことだ。Lyrik aus Deutschösterreich. Vom Mittelalter bis zur Gegenwart. Hrsg. v. Stefan Hock. Zürich/Leipzig/Wien (Amalthea) 1919; Friedrich Sacher: Anthologie junger Lyrik aus Österreich. Gleitwort Richard von Schaukal. Wien (Krystall) 1930; Die Gruppe. Zwölf Lyriker aus Österreich. Hrsg. v. Friedrich Sacher. Wien (Krystall) 1935; Vom Expressionismus zur neuen Klassik. Deutsche Lyrik aus Österreich. Hrsg. v. Josef Pfandler. Wien /Leipzig (Augarten) 1936; Ostmark-Lyrik. Hrsg. v. Adalbert Schmidt. Wien/Leipzig (Adolf Luser) 1939.
- 50 死の直前のトラークルを見舞ったフィッカーの証言とは対照的に、出征したばかりの頃はまるで旅行を楽しんでいるかのような手紙を肉親に送っている。トラークルと戦争については、以下の拙論を参照されたい。日名淳裕「ゲオルク・トラークル「最後の詩」における祖国の死と故郷の再生」[日本独文学会研究叢書141『天国への階段 オーストリア文学における故郷表象の虚構性』2020, 6-19頁]。
- 51 次の書籍のことである。Otto Basil: Georg Trakl. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1965.
- 52 Basil: Erinnerung an Josef Weinheber, S. 12.

Der Fall Trakl

—Die Entdeckung und die Kanonisierung des Dichters Trakl in
der österreichischen Nachkriegsliteratur

Atsuhiko HINA

Zu Beginn der österreichischen Nachkriegsliteratur wurde intensiv versucht, dichterische Vorbilder zu finden, um den siebenjährigen literarischen Bruch, der durch die NS-Kulturpolitik verursacht worden war, zu überbrücken. Diese waren meistens Dichter „Kakaniens“ wie Hugo von Hofmannsthal (1874-1929), Stefan Zweig (1881-1942), Karl Kraus (1874-1936) oder Robert Musil (1880-1942), deren Namen auch heute noch einen sehr „österreichischen“ Nachklang haben. Diese ersten Bemühungen um die österreichische Identität trugen aber nicht zur Selbstreflexion der eigenen Kriegsschuld in der nahen Vergangenheit, sondern eher zur Verstärkung des „Habsburger Mythos“ bei, in dem die siebenjährige NS-Herrschaft als unvermeidbares Unglück betrachtet wurde. Vor diesem Hintergrund wurde der kontroverse Dichter Josef Weinheber (1892-1945) erneut ins Licht der Öffentlichkeit gerückt. Weinheber wurde von der NS-Politik als „Poet Laureate“ geehrt und genoss ein gewisses Ansehen, bevor er vor dem Untergang des NS-Regimes Selbstmord beging.

Auch die literarische Kanonisierung des Dichters Georg Trakl (1887-1914) begann in diesem Nachkriegswien. Dabei spielte die Zeitschrift „Der Turm“, welche die Debatte über Weinheber auslöste, eine wichtige Rolle. Trakl war in seinem kurzen Leben hauptsächlich in Salzburg und Innsbruck tätig und wurde erst nach dem Krieg in Österreich, danach weltweit bekannt. Sein ehemaliger Unterstützer Ludwig Ficker (1880-1967), der lange Jahre in Innsbruck die legendäre Zeitschrift „Der Brenner“ herausgab, bemühte sich durchaus Trakls Name in der Literaturgeschichte einzuschreiben. Aber dabei gab es einige Hürden: Trakl hatte mit seiner jüngeren Schwester eine inzestuöse Beziehung

und beging schließlich im Ersten Weltkrieg Selbstmord. Diese „Schandflecke“ verhinderten seine literarische Kanonisierung anfangs. Der kurze Artikel „Georg Trakl —Hinweis auf den Christen“ von August Zechmeister (Der Turm. 1947. 2 Jg. Nr. 5/6), der diese biographischen Probleme zu lösen zielte, sah in ihm das christliche Paradoxon, das in der Weltliteratur wie bei Dostojewski immer wieder thematisiert worden ist, und legitimierte danach Trakls Person und Werke.

Zwischen Trakl und Weinheber gibt es aus heutiger Perspektive Gemeinsamkeiten auf verschiedenen Ebenen. Beide Dichter gehörten derselben Generation an, bezogen sich halb gezwungen auf den Weltkrieg und nahmen sich schlussendlich selbst das Leben. Nach dem Zweiten Weltkrieg plante man beide im Rahmen des Wiederaufbaus der österreichischen Literatur zu kanonisieren. Das Resultat war jedoch ein anderes: Weinheber wurde heftig abgelehnt und Trakl gern akzeptiert. In den inneren Kreisen der österreichischen Nachkriegsliteraturszene wurden die Kanonisierungsversuche beider Dichter jedoch im Grunde mit dem selben Motiv unternommen.

